

# 「授業評価導入型」ネットシラバスの提案

## — フォーマット作成とそれに対する学生・教員の意識調査及びネットシラバスの開発 —

新潟大学 農学部 佐々木豊

### Abstract

現在、大学において大きな教育改革が求められている。少子化と大学の乱立に加え、ますます高校教育は「自由化・多様化」が進み、それに伴う高校基礎学力の低下と、学習意欲の低い学生の割合が増加する大衆化が進んでいるからである<sup>1,2)</sup>。そのため、従来のような一方通行的な大学の講義ではなく、コミュニケーションを重要視して学生側の意識を積極的に授業にフィードバックし、授業自体の改善に努めることに加え、さらにカリキュラムを含む教育体系や大学教育の改善を常時行える教育システムを開発することが重要といえる。一方、情報化社会の進展に伴い、情報機器を活用した教育は益々その重要性を高めている。特に Web を積極的に活用し、これまでにない教育の在り方を模索する動きが盛んになっている。

そこで、これらの背景を踏まえて、大学の授業で重要な位置を占める「シラバス」に今回着目し、現在のシラバスにおける問題点の改善と、情報化社会に対応した今後のシラバスの形態を提案することとした。また、教育改革や大学改革につながる授業評価の導入を図り、「授業評価導入型」ネットシラバスを提案してそのフォーマットを作成し、学生と教員双方の意識調査を行った。また、ネットシラバスについては実際に開発・公開をし、その評価を得た。

※WWW 上で公開されるシラバスは電子シラバスや e-シラバスと言われることが多いが、ここではネットシラバスと呼ぶことにする。

[keywords] ネットシラバス, 授業評価, 教育改革, 大学改革, WWW, ハイパーテキスト

### I 緒言

現在、大学教育の抜本的な改革が求められている。これまでの大学教育は、学力や学習意欲の高い学生を対象に、自分で勉強することを前提とした授業を当然としてきた。大学教員は研究を主体としてその片手間に教育を行うというスタイルが容認され、学生に配慮の無い独学を求め、授業力（表現力や分かりやすさなど、授業を行う上でのテクニック）を磨かず、効率の悪い教育体系でもそれに対する明確な指摘や改善を行うシステムが存在しなかった<sup>2)</sup>。

しかし、少子化に伴う大学の大衆化時代を迎えることになり、その様相は一変してきている<sup>1,2)</sup>。希望者のほとんどが大学に進学できる状況が起こりつつあり、そのため大学入学時において「学力と学習意欲の低下した学生」の占める割合がしだいに大きくなる傾向が高まっていく。大学の大衆化時代においては、従来のような教育軽視を改め、「授業力」を身につけないと授

業自体が成立せず、ひいてはそれが大学や学部教育の体系全体に影響を及ぼし、社会から認知されず、「淘汰される大学」となる危険性を持つ。

また、企業側も、日本社会の経済が成熟期であることから効率の良い経営体制の確立を目指し、社内教育に力を注ぐ今までの形態から、「問題を提起し解決する能力」を有した即戦力となる人材を求めつつある。この入学者の大衆化と社会的な要望から見た大学教育の位置付けを図1に示す。

さらに、現在我々を取り巻いているコンピュータとインターネットを中心とした情報化社会は、予想をはるかに越えて加速度的な進歩を遂げ、特にインターネットを中心としたサービスやコミュニケーションがますます重要となってきた。大学の教育や広報活動もそれにもれず、今後更にインターネットを想定したそれらのシステムを構築していくことは重要であると考えられる。

このような背景を踏まえ、大学の教育において重要な位置を占めるシラバスに着目し、現在のシラバスの問題点を改善し、今後さらに発展する情報化社会、そして大学の 대중化に対応した教育サービスの中核となる「授業評価導入型」ネットシラバスを提案し、そのフォーマットを作成した。

「授業評価導入型」ネットシラバスとは、Webの利点を活用したインターネット上で閲覧可能なシラバスに、授業評価を加えたものである。またこれに対し、学生と教員双方にアンケート調査を行い、「授業評価導入型」ネットシラバスの改善を図った。このネットシラバスは単なるシラバスのWeb版というレベルではなく、大学の教育改革を実行するための教育システムの一翼をなすべきであると考えている。

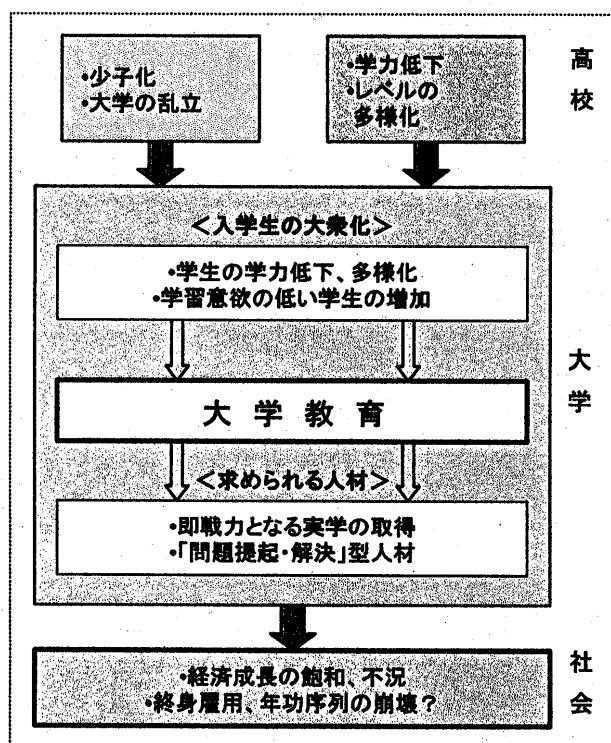


図1 大学教育を取り巻く環境

## Ⅱ ネットシラバス

### 2-1 シラバスの特徴と問題点

シラバスとは、学生に講義の目的や概要、予定を提示し、その講義がどのような内容で、かつ、どのように進められていくのかを示した一種の講義計画書である。これをもとに学生は選択する講義を決定したり、予習・復習を行う参考にした。質の高い教育を実施するためには、講義の目的や予定、テキストや参

考文献、成績の評価方法などを明確にすることは重要といえ、大学教育において重要な位置付けとなる。また、学生側にだけでなく、教員自身の講義に対する自己点検と計画性の意識を促し、比較的自由的な形態の講義が許される教員にとっても、授業レベルや内容の透明化を図るという点で意味のあるものだと考える。

しかしながら、現在のシラバスには次に示すようにいくつかの問題点が挙げられると考える。

- 1) 教員による記述内容の個人差が激しい。
- 2) 詳細に書かれていても記述内容に難解なものがあり、学生ばかりか他の教員にも漠然としたもののしか想像出来ないものも存在する。
- 3) 必要最低限の情報であり、活用できる情報が限定されている。
- 4) 教員の異動に伴う授業変更・改善がすぐに反映できない。
- 5) 動的に授業を改善していく時、細かな修正部分をシラバスに書けないので、学生側に誤解を招くことがある。
- 6) シラバスだけでは、その授業の本当の価値が未受講者には分からない。
- 7) 視覚情報に乏しく、理解しづらい。

である。

### 2-2 ネットシラバスとその特徴

ここで、現代社会を取り巻く環境と今後の動向を考察する。現在、コンピュータとそれらをつなぐ通信・ネットワーク技術の進展は目覚ましいものがあり、意識する・しないに関わらず、情報化社会の中で我々は生活している。この情報化社会に対応したサービスやコミュニケーションはますます盛んとなり、ネットバンキングやオンラインショッピング、バナー広告や公共機関の情報提供など、様々なものが登場している<sup>3,4)</sup>。今後、ほとんどのサービスはインターネットを中心とする形態に変化していくといっても過言ではない。したがって、大学においても積極的にこの現状を認識して教育システムや情報公開システムを構築していくことは重要と考える。

特に、Webには次の利点があり、教育に積極的に活用していく必要がある。まず、不特定多数のユーザーに、リアルタイムで情報提供を可能にすること、次に

「ハイパーテキスト」と呼ばれる関連知識にリンク出来るテキスト構造が基礎技術にあることが挙げられる。これにより、分かりやすい構造で内容を構成することが可能である。さらに単なるテキスト情報だけでなく、画像ファイルやアニメーションなども含めた視覚情報に考慮できることも挙げられる。無論、視覚情報だけでなく、音声などの他の情報も加えることは容易である。そして情報提供だけではなく、情報を受け取るなど双方向性を重視し、ユーザーとコミュニケーションをとることも可能である。これらに関して、特に情報教育においてはコミュニケーションを重要視するため、ICT (Information, and Communication Technology) 教育と呼ばれる。その他、紙資源の浪費を防ぐなど、効果に対する資源消費が極めて小さいことが挙げられる。

表 1 冊子版シラバスとネットシラバスの比較

	冊子版シラバス	ネットシラバス
閲覧者	限定された関係学生・教員	関係学生・教員・一般社会（但しネット環境は必要）
紙資源消費	大	小
更新	更新しづらい	適宜更新可能
情報の質	古く、適切でない場合がある	基本的に新しく、信頼性がある
情報量	紙面の関係で必要最低限	自由に追加可能
教員の自由度	小	大
コミュニケーション	困難（但し、電子メールアドレスを記載することは可能）	簡単（電子メールや自分の Web を活用）
情報形態	テキストのみ	カラーテキストや画像、音声など

以上のように、この情報化社会に対応し、Web の利点を十分活用した「ネットシラバス」を開発して活用することは重要と考える。Web を利用した「ネットシラバス」の利点をまとめると次が挙げられる。

- 1) 常時掲載でき、変更点や修正点などをリアルタイムに反映することが出来る。
- 2) 学内関係者だけではなく、一般の学外者にも簡単に閲覧できる。
- 3) ハイパーテキストの利点を利用し、項目や具体性に応じて階層を深く出来る。
- 4) 視覚情報を強化し、より理解を深める表現が可能である。

能である。

- 5) 紙資源の消費を押さえることが可能である。
- 6) 授業間の関連性や教育体系に対する位置付けを示すシステムに改良するなど、新しく機能を開発し、追加出来る拡張性を有する。

従来のシラバスとネットシラバスの比較を表 1 に示す。表 1 のように、ネットシラバスは現在の冊子版シラバスと比較し多くの利点を有する。しかし、この「ネットシラバス」だけでは本当の授業のレベルや大学教育レベルを理解してもらうことが困難であり、次に挙げる授業評価が必要であると考えられる。

### Ⅲ 「授業評価導入型」ネットシラバスの提案

#### 3-1 授業評価の重要性

大衆化した大学教育は非常に難しいものがある。様々な学生が進学してくるために、習得した知識や学力レベルが多様化する。その際、これまでのような一方通行的な講義形態では授業そのものが成立しない可能性がある。また社会に優秀な人材を排出するためには、常時教育科目やカリキュラムシステムの「評価」とそれに伴う「改善」がなくてはならない。これと同様に、シラバスとは学生側に提示した教員側が示す講義内容書であり、これに沿って授業が実施されたかをチェックすることが必要となる。これらに関して中心的役割を果たすのが「学生による授業評価」である。表 2 に従来の大学と今後の大学像を、表 3 にこれからの大学授業に求められる条件を考察してまとめた。

授業評価を導入する利点として次のものが主に挙げられる。

- 1) 授業の活性化と透明化
- 2) 学生側の意識改革
- 3) 教員の意識改革と大学の教育改革

授業の実情はシラバスだけでは分からない面が大きい。実際に受講している学生の評価から、受講者に対するその授業の価値を知ることが出来る。評価が高ければ、未受講者に対する呼び水や授業間の活性化につながる。

次に、教員側だけではなく、アンケート項目に学生自身の受講態度を考えさせる項目を設けることで、学生が反省する機会を与える事が可能となる。授業は教

員と学生双方により成り立つものである。これまでの一方通行的な授業形態は反省する必要がある、教員側に授業力の向上や大衆化した学生のレベルを考慮した工夫が大きく必要とされるが、同様に大学に入学し学問を学ぶという意識を学生側に自覚してもらう必要がある。授業の質を考える時、教員側の改善だけではなく、学生側の意識を含めた改善があつてこそ、初めて向上できるものとする。その点で良い機会となる。また、自分達の意見を授業に反映するという形態をとることにより、学生の授業参加の意識が生まれて積極性も期待できる。さらに従来のように受身の態度で臨むのではなく、能動的に授業を受講したり自己主張したりすることへの重要性を理解してもらうことも期待される。

最後に、教員の自主的な意識改革が進み、教育レベルが向上する。これまでの無責任な教育に対する姿勢を常に改善する機会となることと、一授業だけでなく、カリキュラムや教育体系を見直す際の重要な指標となると考える。

表 2 従来の大学と今後の大学像

(従来の大学)	(今後の大学)
「研究」の重視 「教育」の軽視	「教育」と「研究」の両立
「授業力」軽視	「授業力」の重視
体系化されていない、教員個人に依存する教育 教育の質の不均一	「教育体系」「カリキュラム」「授業」の向上・効率化
授業内容・レベルの不透明	授業内容・レベルの透明化 情報公開

表 3 大学授業の条件

これからの大学授業の条件
○学生のモチベーションを高める
○教員の授業力を高める
○多様な学生に対応する (受講者レベルにあわせた授業の動的設定)
○教育体系との位置付けを明確にする
○授業評価による自己改善を行う
○成績評価基準などの情報公開を実施する

### 3-2 授業評価の現状と問題点

授業評価を実施している大学には次のような所がある<sup>2)</sup>。まず、大規模でありながら全学的に授業評価を実施しているのが東海大学である。その他、国際基督大学、慶應義塾大学藤沢キャンパス、多摩川大学、立

教大学経済学部、早稲田大学(自治会)、また授業評価を教員の昇進や給与などにも使用しているのが東京理科大学である。

これらの例では、ほとんどの大学において、次のような問題が挙げられる。まず、授業評価を実施するに当たっては、授業評価そのものに反対する意見が大勢を占めていたことである。大規模に授業評価を導入している大学はまだ少数である。この問題に関して次の点を考慮する必要がある。すなわち、授業評価とは教員の評価とは異なり、単に授業そのものの改善に役立て、カリキュラムや教育体制の改善のためのフィードバック情報であるということである。教員の評価とは違うということを教員並びに学生に理解してもらう必要がある。

しかし、更に注目すべき点がある。これら授業評価を実施しても「マンネリ化」や「参加者の減少」が指摘されていることである。原因は、「授業評価の実施」と「結果の情報公開」を義務化しなかった点にある。特に、情報公開するかしないかはほとんどの大学で教員の自主性に任せ、多くは教員個人にフィードバックされるだけのものとなっている<sup>2)</sup>。こうなると、アンケートに答えている学生にとって現実味と授業の改善に参加している意識が希薄となって効果がなくなることと、さらに外部に公開しないという外圧が無い状態では改善を怠る教員が出てきてしまうという現実があるからである。

このように、折角授業評価を行っても、それが教員にしかフィードバックされないと十分な効果は望めない。まず、学生にとっての授業参加の意識が消失する事、次に教員内でも社会や同一組織からの外圧が無いため努力を怠る傾向にあるためである。授業評価で情報公開している従来の例でも図書館に冊子がひそやかに置かれてほとんどの学生は知らなかったり、教授会で全体の傾向のみを示し、他の教員の個人情報には知らせたりしない場合が多い。これでは効果的な教育システムの改善は望めない。

### 3-3 「授業評価導入型」ネットシラバス

以上の点から、今回ネットシラバスに授業評価を導入した「授業評価導入型」ネットシラバスを提案する。授業評価は公開されないと教育の改善効果が小さいと

いう問題点に対し、「ネットシラバス」は授業内容の紹介の意味合いがあるため、講義の直接的評価である授業評価を項目として設け、一般に公開するのである。効率的に教育体制を改善していくためにも授業評価の結果を直接関係のあるネットシラバスに掲載し、学内のみならず学外にも広く公開していくことが重要であると考え。これだけのプレッシャーの中では教員も真摯な態度で授業改善をせざるを得ないと予想されるし、良い評価の授業が増えてそれが情報公開されることは、その大学や学部の教育体系の広報効果にもつながる。これは極めて重要であると考え。しかし、情報公開、それも社会に向けての情報公開など必要性があるのかといった大きな反対を受ける可能性は高い。これについてはフォーマットを作成後、学生と教員双方にアンケート調査を行って意識調査を試みた。

#### IV 「授業評価導入型」ネットシラバス第一次案の作成及びアンケート調査

##### 4-1 ハイパーテキスト構成

前述したようなシラバスの問題点改善、Webの利点、授業評価の導入を考慮し、特に今回次の点を重要視してフォーマットを作成した。

- 1) 透明性と広報効果を重視したハイパーテキスト構成
- 2) 視覚情報の重要視
- 3) 授業評価の情報公開

図2にネットシラバスのトップページの構成を示す。下線部はハイパーリンク項目である。具体的に次の項目を設けている。①科目名、②担当教員名、③概要、④教員からのメッセージ授業の重要性や特徴、勉強方法など、⑤詳細情報、⑥受講情報

項目③の概要では授業の必要性や全体像、簡単な内容を明記し、授業内容が大まかに把握できるようにする欄とした。これにより、その講義が一体どのような内容であるかの大きな全体像を把握できる。項目④を設けた理由は次である。授業レベルはある一定以上のものであることが重要であり、その意味では担当教員が授業に関する内容についてすべて自由にして良いわけではない。しかし、逆に教員の個性や自己努力が現れるようにすることは重要であると考え。そこで、

授業は教員の作品と考えられるので、教員の「顔」が受講者に分かるようにこの項目を設けた。ここでは概要を更に踏み込んで、その授業の重要性や特徴などを挙げることを想定している。また、学習方法を示したり、自分のURLやメールアドレスを書いたりして、提供している情報の補足やコミュニケーションを取れるように配慮すべきではないかと考えた。

項目⑤は、実際に授業を選択したり、学習したりしていく上で必要となる具体的な情報を掲載する。この中に次のような項目を設けた。(1)授業目標・計画、(2)成績評価方法、(3)使用テキスト・参考文献、(4)学生による授業評価、(5)その他である。現在のシラバスに掲載しなければならない情報へハイパーリンクを張り、次の階層のハイパーテキスト情報に移ることとする。これにより、必要な情報は提供しつつ、閲覧者の希望レベルに対応した情報提供が可能となるのではないかと考えた。また、これまでは紙面の限定があったが、個々の教員の努力により、階層や項目を更に設けるなどの自由度が得られる。そしてこの項目で、学生による授業評価項目を加え、授業の一つの質を提供する。その他とは担当教員の自由度を考えたものである。

科目名	
(科目名)	
担当教員名	
(担当教員名)	
概 要	
(授業全体像など)	
担当教員からのメッセージ	
(重要性や勉強方法、Eメールアドレスなど)	
詳細情報	
授業目標・計画	成績評価方法
使用テキスト・参考文献	学生による授業評価
その他	
受講情報	
(単位や開講時期などの情報)	

図2 ネットシラバス（第一次案）トップページ

授業評価はどの授業にも共通するような評価項目に加え、その授業独自の設定項目に対する授業評価結果を加えたり、画像を中心にした視覚的効果の高い授業風景の情報提供をしたりすることを基本的に想定している。授業評価の項目に関しては、これまで著者が行ってきた情報処理演習に対する3セメスター分に当たるアンケートの結果を踏まえ、表4に示すような授業評価項目を試作し、新潟大学農学部 生産環境科学科 二年生を対象に開講されている情報処理演習Ⅰに2000年度実施した。

表4 今回実施した2000年度 情報処理演習Ⅰに対する授業評価項目

今回実施した授業評価項目	
1.	この授業は重要だと思うか？(将来的に役立つかなどを考慮する)
2.	この授業の理解度は？
3.	理解不足は自己努力により解決できるものか？
4.	自己努力を点数化するとどれに当てはまるか？
5.	この授業は面白いのか？
6.	教員の努力や工夫、意欲が感じられるか？
7.	この授業の目標・目的が達成されるような教育計画・内容であるか？
8.	受講前と後では自分の能力や知識、視野が向上したと思えるか？

#### 4-2 「ネットシラバス」に対するアンケート結果

以上、「授業評価導入型」ネットシラバスを、新潟大学農学部生産環境科学科で実施されている情報処理演習を対象に試作し、2000年9月にアンケート調査を行った。アンケート対象は新潟大学農学部の教員(37名)と、学生(生産環境科学科2年生 30名)とした。先ず、ネットシラバスに関するアンケート結果を図3～5に示す。

デザイン、項目、必要性、いずれをとっても9割程度以上は肯定的な意見だった。

#### 4-3 授業評価導入に伴うアンケート結果

次に、授業評価の導入に関するアンケート結果を図6～8に示す。

教員側に多かった意見として、段階的に実施すべきであるとの意見が挙げられた。特に、情報公開に対しては慎重な意見が多かった。また、この結果はアンケートに協力していただいた教員の意見であり、実際には結果が逆転する可能性も高いと考える。

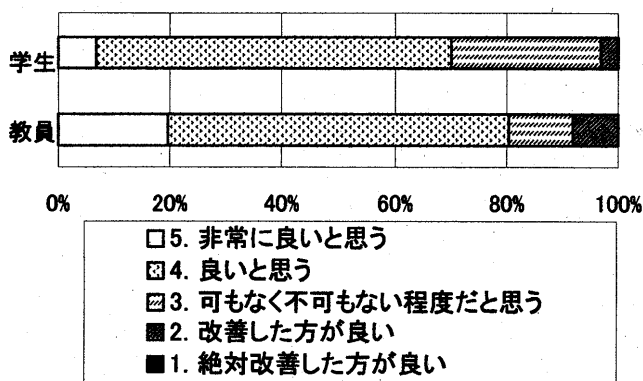


図3 ネットシラバスのデザインに関するアンケート

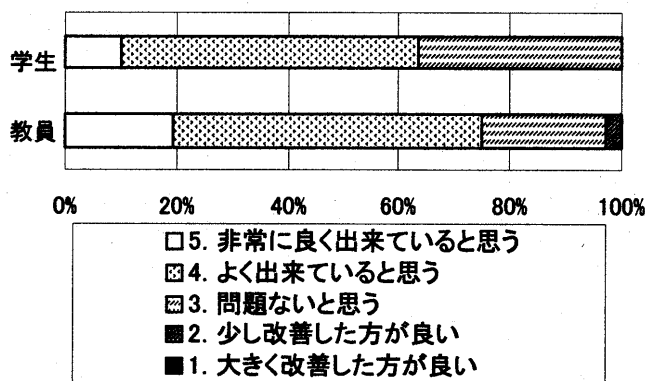


図4 ネットシラバスの掲載項目に関するアンケート

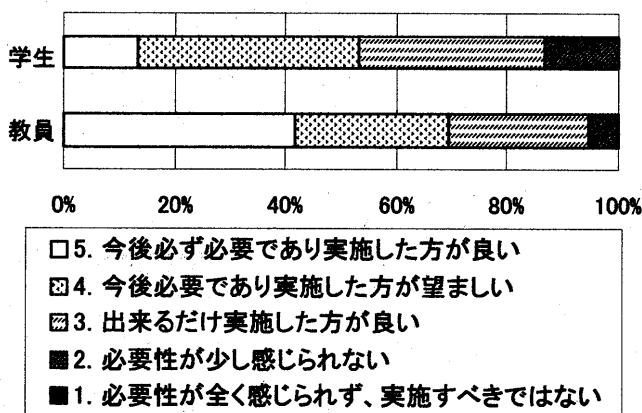


図5 ネットシラバスの必要性に関するアンケート

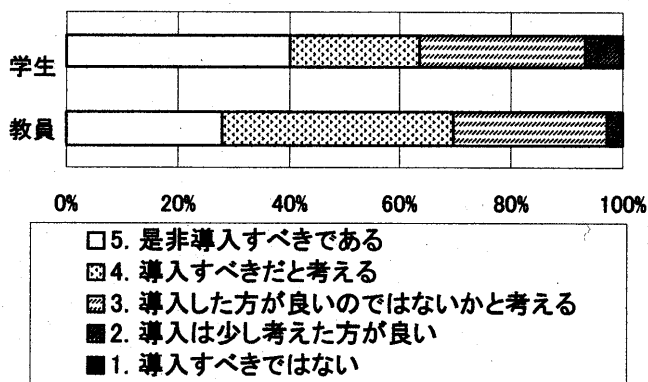


図6 授業評価導入に関するアンケート

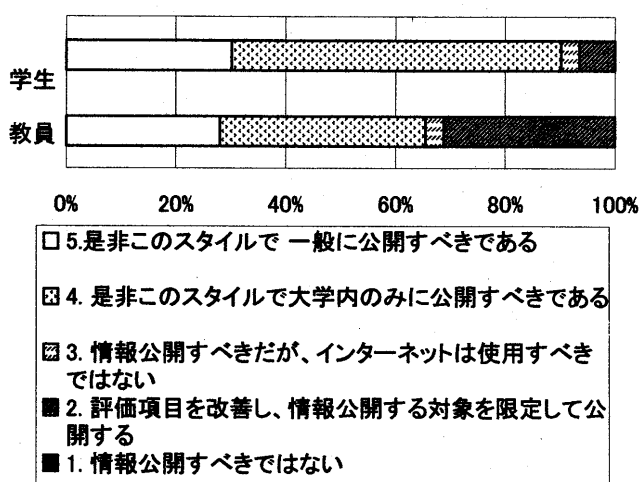


図 7 授業評価の公開レベルに関して

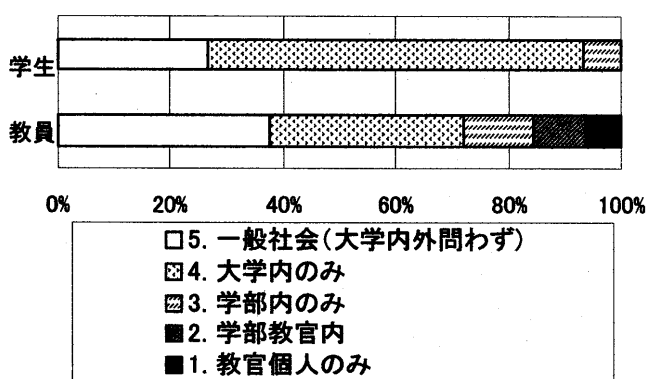


図 8 授業評価の公開レベルに関して

#### 4-4 問題点などの総合的な考察

今回のアンケートにおける評価の理由から考察すると、特に以下の事項を考慮して改善する必要があると改めて感じた。

まず、ネットシラバスのフォーマットに関して主に次の点である。

1. 冊子版シラバスとネットシラバスの差の明確化：情報の重複で終わるのであれば単なる現行のシラバスのWeb版で終わってしまう。また、ネットシラバスの利用には次のケースが想定される。

- 1) 学生が受講科目を決定する。
- 2) 受講者が現行シラバス(冊子)では得られない詳細情報を得る。
- 3) 受講者(閲覧者)が教員とのコミュニケーションをとる。
- 4) 教員が他教員の科目を閲覧する。
- 5) 教育体系を見直す際に各科目をチェックする。

6) 学外者が大学の教育内容やレベル、雰囲気調べを。

以上から、現行の冊子版シラバスは「科目に対する直接的な利便性」を重要視すべだと考える。これに対し、次の点を重要視し、ネットシラバスは現行の冊子版シラバスと差別化を図るべきである。

- 1) 追加できる詳細情報の充実
- 2) 文章表現(広報効果や多くの閲覧者に見てもらうことを考慮して平易に表現する。冊子版で行っていればそのまま流用可能。)
- 3) 画像などの視覚情報
- 4) コミュニケーション(メールアドレス、自分のWebのURL)

冊子版シラバスを単にネット上に掲載することは意味がないと考える。

2. 記述内容の明確化、記載情報の洗練化：ネットシラバスは多量の情報を記載できる利点は存在するが、逆に冗長的になりやすいため、情報の洗練化が出来るように記述内容を明確にすることが重要であることが分かった。

3. ファイル管理を考慮した教員の自由度の拡大：自らWebを作成できる教員には自由度を持たせるべきである。但し、ファイル管理の関係もあるため、多くの情報はネットシラバスから自分のWebへリンクを張り、公開することになると考える。

4. 閲覧者とのコミュニケーション強化：メールアドレスの明記を義務化、更に自分のWebアドレスへのリンクの推奨、返信義務の徹底を行うことが重要ではないかと考える。

5. トップページのデザイン構成：現在のままでも良いが、利便性や分かり易さ、その他の情報も含めて再検討の余地があった。可能なら視覚的なやさしさなども含めて教員の個性が現れた方が面白いと考える。

6. 利便性の保証：基本的に現行の冊子版シラバスを土台とし、教員の自由度は保ちながらも教育の参考にしやすいものとする。また冊子版シラバスを活用することにより、教員の負担は軽減する。

7. その他(教員の個人情報とのリンクなど)：教員情報へリンクを張る。学生の個人情報には配慮するなどである。

次に、授業評価に関しては以下が挙げられる。

1. 評価項目の再検討：情報公開も考慮し、教員内で再検討する。但し、情報公開は絶対条件であるとする。
2. 教員の学生評価項目の検討：教員の学生に対する評価を加える。
3. 授業評価を踏まえた自己評価及び改善方針の明言と実行：具体的にどのように改善していくかを明記し、実行出来るように体制を作る。
4. 教員の合意（意識改革）：話し合いの場を多く持ち、授業評価の導入と積極的な情報公開は必須であると思統一する。
5. 段階実施の綿密な計画化：段階的な導入が現実的だと考えるが、詳細な計画をたてることと、次の段階に進むための条件を明確化すること。

## V 「授業評価導入型」ネットシラバスの今後の改善及び実施時の問題点の考察

### 5-1 新ハイパーテキスト構成

上記の考察をもとに、特に「ネットシラバス」のフォーマットを作成しなおした。これを図9に示す。また、主なポイントは以下である。

1. 情報を整理して、トップページにインパクトを与え、広報効果や授業の雰囲気をも優先した。
2. 洗練された冊子版シラバス（新潟大学農学部 森井助教案）を有効に活用し、受講者に配慮した。これで冊子版シラバスをきちんと作れば省力でネットシラバスも作成できる。
3. 教員の自由度を配慮し、冊子版シラバスとの差別化を図る項目として、コミュニケーションボードを作成した。
4. メールアドレスを前面に出し、閲覧者とのコミュニケーション機会を重要視した。

また、実施に伴い予想される問題点としては以下の二点が挙げられる。

1. フォーマットを規定しても、その意味を十分理解し協力する教員がどれだけいるのかが先ず疑問である。冊子版シラバスもそうであるが、教員が作成したシラバスやネットシラバスをそのまま使用するのではなく、フォーマットに則していなければ修正を求めるチェック機構が必要不可欠と考える。

2. 教員の自由度としてコミュニケーションボードという項目を設けたが、教員あいさつ以外をどのようなことに使用するかを決定することである。

ネットシラバス自体の教育情報の提供やコミュニケーションのためのポテンシャルは高いが、積極的に活用しなければ意味が無い。必要最低限の情報は記載してもそれ以外自分で活用しようと努力しなければ、本来のネットシラバスの効果や役割が果たせない可能性が出てくる。

### 5-2 授業評価導入について

アンケート結果を踏まえ、さらに今後大学の授業に必要な要素、授業評価項目に対する学生のアンケート結果、他大学（東海大学）などのアンケート項目を参考に修正したものが表5である。但し、あくまでアンケート項目の改善に絞った。

先ず、重要なのが次の前提条件であるとする。

**前提条件**：教員と学生の意思統一を図る。授業評価の目的と各項目の意図、授業とは教員と学生の双方から成り立つもので、お互いの努力が必要であるというコンセンサスをとる。

項目は表5に示すようなものに修正し、項目1～9は五段階評価とし、項目10に関しては10点満点とする。また、出来れば各項目に関して理由を聞くようにした方が正しい解析が出来るとする。

表5 他大学実施案を考慮した新しい授業評価項目案

新しい授業評価項目案
1. この授業は重要だと思いますか？（重要とは実学として役に立つものか、人間形成を行う上で教養を深められるものか、どちらかを考慮する）
2. この授業の理解度はどのぐらいですか？
3. 理解不足は自己努力により解決できるものですか？
4. 自己努力や受講態度（遅刻や私語を考慮）を点数化するとどれに当てはまりますか？
5. この授業は面白いですか？
6. 教員の努力や工夫、意欲が感じられますか？
7. この授業の目標・目的が達成されるような教育計画・内容でしたか？
8. 受講前と後では自分の能力や知識、視野が向上したと思えますか？
9. この授業を後輩に勧めたいと思えますか？
10. この授業の総合点数は何点ですか？



表 6 目指すべき大学教育

大学教育の大きな目的	
I. 「実学」	社会で役立つ実学を身につける
II. 「人間形成教養」	「考える」ことの面白さを学べ、豊かな人間を形成するための教養や多視野・思考を身につける

項目1について：問題はどのような基準で重要かどうかを判断するかということである。これについては、表6に示すように「実学」という面と「人間形成を行う上での教養教育」という面から重要性を判断してもらってはどうかと考える。いずれにしても何のためにこの授業を受けるのか、どのようなことで受講者にメリットがあるのかなど、その授業の重要性が示されなければ受講者のモチベーションが下がり、充実した授業を形成できなくなるのでこの項目は必要であると考ええる。

項目2について：いかにレベルの高い授業であれ、受講者に理解されていなければ全く授業をやっていないことと同じである。レベルは保ちながらも消化不良をおこすような授業は改善すべきであり、その点で受講者の理解度を調査する必要があると考える。

項目3,4について：単に授業を評価するものではなく、受講者自身の受講態度や自己努力について反省を促す項目とする。外罰的傾向があるか内罰的傾向があるかで結果が左右されるが、実際にアンケートを実施した所、多くは自己反省する傾向にあった。

項目5について：面白いという基準も個人の価値観による所が大きいので評価に統一性がない危険性を有するが、受講者が何を面白いと感じるかを参考にし、それが改善できる問題であれば授業の質を向上させることが出来る。また、面白いと思ってもらえれば独自に学習を進めてもらえるので、この項目は非常に重要であると考ええる。

項目6について：教える側の熱意や努力が感じられないと受講者側のモチベーションも上がらないので、教員の自己反省を促すためにこれは必要であると考ええる。

項目7について：授業前に目標や計画を明確にして情報を提供し、授業終了後、意図した計画や内容が受講者側から見て納得いくものであったのかの評価を得る

ことは重要であると考ええる。

項目8について：一番重要な項目になると考える。学生のレベル差は年や大学、学部により異なるはずである。しかし、受講前と比較してどれだけ能力が向上したのかはその授業の価値に直接つながると考えるからである。

繰り返すが、このような授業評価やアンケートをする場合、最も重要であることは教員と学生の意志統一を図っておくことであると考ええる。何のための授業評価なのか、どのようなことに生かし、どんな点を評価して欲しいのかを明確にして学生側に理解してもらえれば、完全とはいかないまでも質の高いフィードバック情報となると考える。

### 5-3 実施に伴う問題点

実際に実施することを想定すると、次に挙げる問題点が考えられる。

1.作成・管理・運営体制の確立：現実にはWeb作成が可能な教員と可能でない教員の問題、データのセキュリティを考慮した管理、作業のシステム化による負担の減少を考慮し、所属機関を想定して作成・管理・運営体制を、ネットシラバス、授業評価双方について確立する。

2.情報設備や機材の充実：就職情報の取得や学部Webの活用、今後の情報教育も含めて、大学運営の長期的視野を考慮した改善が必要である。

3.教員・学生の情報教育の必要性：Web作成やデータ転送、情報化社会の常識やネット関連知識を含めて教員・学生全体に対する情報知識のレベルアップを図るようにする必要がある。

4.教員・学生双方の意識改革：教員には社会的な背景を含めて教育の改革が必要であることを認識してもらい、学生側には建設的な授業評価などが行えるように意識を変える機会を多く設ける必要がある。

これらは新潟大学農学部を対象に考察したものであり、他大学や学部では当てはまらない面も多いかとは考える。しかし、多かれ少なかれ、同様の問題をはらんでいるのではないかと推測する。ネットシラバス試作内部公開URL：詳しい解析やアンケート結果はWeb化し、次のURLで公開している。

[http://www.agr.niigata-u.ac.jp/~ysasaki/etc/net\\_syllabus\\_p](http://www.agr.niigata-u.ac.jp/~ysasaki/etc/net_syllabus_p)

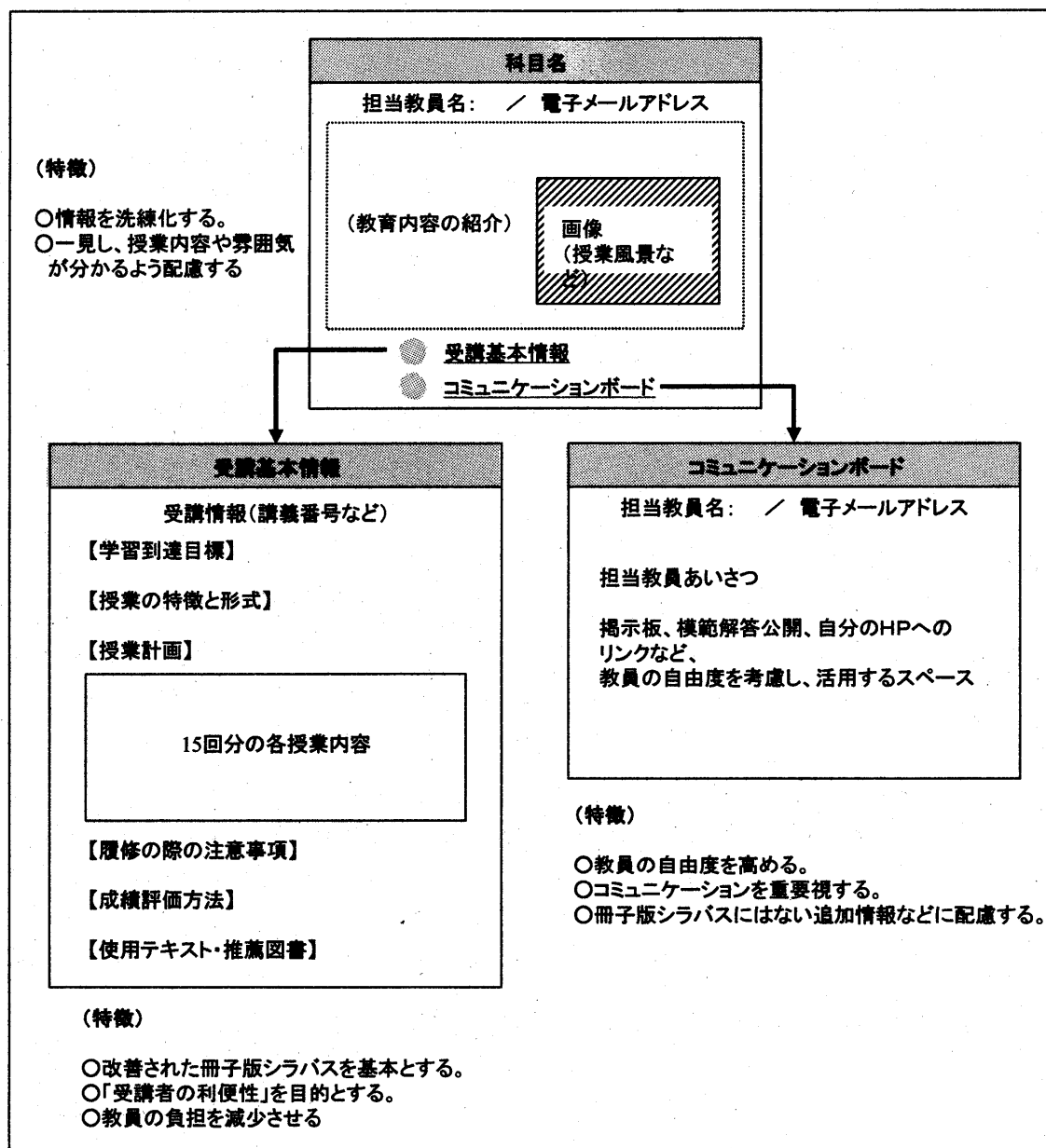


図 9 改良版ネットシラバスのハイパーテキスト構成

## VI 結言

今回、「授業評価導入型」ネットシラバスを提案・試作し、そのアンケート調査を行った。大学教育は自由度の高い分、必ずしも効果的に体系化されておらず、問題も多々あることが分かった。また、教員の意識差も顕著であり、多くの問題はなかなか変わらないであろうとの印象を受けた。これらはアンケートにも指摘されていたが、トップダウン方式で決定していくしかないであろう。但し、単なるトップダウンでは形骸化してしまう危険性が高いため、常に教員側の意識改革を達成できるように、合意と理解といったボトムアップも必要であると考えた。

ここまでの、2000年11月までに行ったものである。

その後ネットシラバスについては、農学部生産環境科学科内で試験的に開発・2001年5月に公開した。

以下が URL である。

[http://www.agr.niigata-u.ac.jp/main/education/education\\_support/net\\_syllabus\\_2001/f\\_syllabus.html](http://www.agr.niigata-u.ac.jp/main/education/education_support/net_syllabus_2001/f_syllabus.html)

これに対する学生からのアンケート結果を示す。先ずネットシラバスの必要性については、必要性を否定的にとらえる意見は無かった。また図 10,11 に示すように、ネット時間割と各教科のネットシラバスについて、①デザイン/レイアウト、②使いやすさ、③掲載情報に関し、5段階評価をしてもらった。

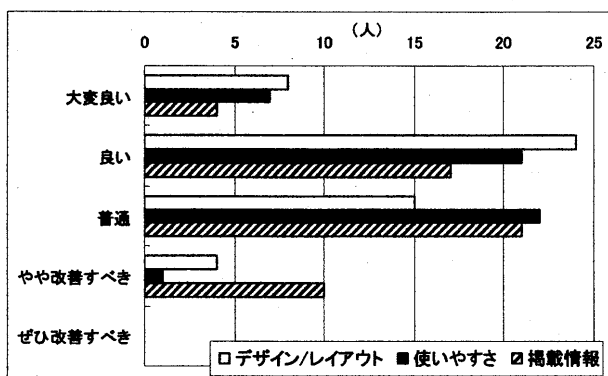


図 10 ネット時間割に関する評価

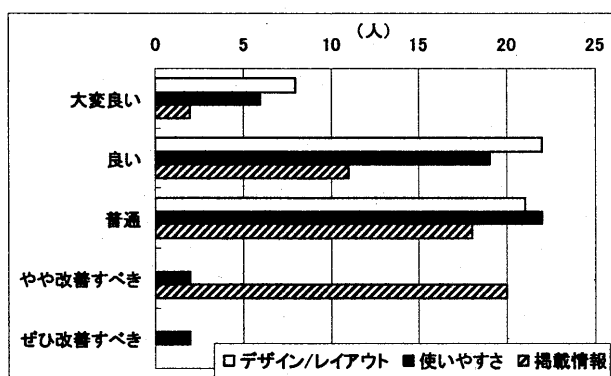


図 11 各教科のネットシラバスに関する評価

また、満足度を 10 点満点で評価してもらったところ、平均と標準偏差は表 7 のようになった。

表 7 満足度の点数化評価

(2001 年度生産環境科学科 2 年生 50 人対象)

対象項目	評価点 (10 点満点) の平均と標準偏差
ネット時間割	7.33±1.57
各教科のネットシラバス	6.90±1.25
トータルとしてのネットシラバス	7.24±1.13

機能や作業に関する改善点としては、①検索機能の追加、②作業の省力化、③複数の情報端末への対応などが挙げられる。

次に、やや改善すべきとされた掲載情報についての主要な不満要素としては以下が挙げられると考える。

#### 1. 各教科のネットシラバス情報が少ない

現在は生産環境科学科で試験的に実施しているが、生産環境科学科内でも情報が無いものがあること、さらに他学科の情報もあった方が良いとの意見も多かった。これについては、基本的に教員の Web 作成能力が向上する、ネットシラバスのポテンシャルを認識する

など教員側の意識改革が不可欠と考える。また、サイト開発/運営する側としては、いかにネットシラバス作成の労力を減らし、教員の意識改革をもたらすよう努力できるかが課題であると感じた。更に学生の意識も向上し、教員側に対して積極的に教育の質の向上を要求することが必要だと考えた。

#### 2. 冊子版シラバスとの差別化について

これは現在のネットシラバスでも非常に意識してフォーマットを作成しているが、要はこのネットシラバスで、受講時にどのような教育支援/活用をすることが可能なのが一番重要だと考える。担当授業ではお知らせやソフトのダウンロードを積極的にコミュニケーションボードで行っているが、教員がどれだけのネットシラバスを活用できるかが基本的に今後望まれることだと考える。また、情報を洗練させることとネットシラバス独自の追加情報をどう増やすかの両立が難しいと感じた。

最後に、一番重要なこととして、繰り返しになるがネットシラバスは冊子シラバスを WWW 版にしたものでは全く意味が無く、シラバスを通した「教育の質の向上/透明化と、学生とのコミュニケーション」が不可欠と考える。これを実現させるためには、①教育に関する教員の意識改革と、②Web を作成しそれを活用する教員の情報処理能力の向上が最低限必要である。これに加え、③ネット接続環境の充実が挙げられるのではないかと考察した。

最後に、アンケートにご協力いただきました、新潟大学農学部教員の皆様、2000/2001 年度の生産環境科学科二年生の学生諸君、積極的にご協力・ご指摘いただきました、紙谷智彦教授、鈴木敦士教授に感謝いたします。

#### 参考文献

1. 中村忠一：大学倒産，東洋経済新報社，2000
2. 安岡高志他：授業を変えれば大学は変わる，プレジデント社，1999
3. 日本インターネット協会編：インターネット白書 2000，インプレス，2000
4. インターネットビジネス研究会：インターネットビジネス白書 2000，ソフトバンク，2000